

四 自己を見失つた人々

大勢の盜賊が、盗み取つたものを中に積み置き、夫々分配を始めた。「それこの頭巾は、藥罐の勘助が頭を隠すに恰度よい。勘公一つ被つて見ろ、どうだ暖かだらう」。「俺は嬖奴が大きな腹を抱へて、もう臨月に間もあるまいから、其方の端の襪褌を貰つて往かうか。オツと其子供のちゃんく子も呉れ、餓鬼が出来たら着せるから」。「此の縮緬の被布は云何する。誰も之を着るやうな可愛い奴を持つて居る面がないな。賣り飛ばして金にしてから分けやうか」。「時に烟草入が一つあつたが、あれは云何した。革はつまらねもんだが、緒締の珠が珊瑚の六分で、金物は金彫の唐獅子、筒が象牙だ。仲々贅澤だ。棄賣にしても百兩は大丈夫よ」。「さうくあれは大したものだ。誰も隠しや仕なからう」と詮議をしたが、更に見當らない。頭立つた賊が不思議に思つて、子分一同を見渡し「はてな、此中に盗みさうな奴は誰も居ねへがな」。

盜賊も盜賊と云はれたくなく、又云ひたくないと見える。こゝが本心のあの證據。けれども之と同時に虚榮虚飾の念が伴うて、進んで我身を忘れるのが情ない。悪人になりたくないのはよいが、自らそのなりたくない悪人たるに氣付かぬのは、残念でないか。

昔、或禪僧が女郎買に參りました處、相敵の女郎が非常に寢坊で一向に眼を覺さない。頻りに呼び起しても更にこたへぬ。何か悪戯でもしたら眼を覺すであらうと考へ、彼方此方見廻すと枕元に鏡臺がある。鏡臺の抽匣を開けて見ると、中に剃刀が一つあつた。これ幸と剃刀で女郎の髪を一剃ちよと剃つたが、女郎は白河夜船で鼻から提灯を出して居る。二剃チヨリとやつたが、矢張口をあいて大息をふいて居る。三剃目をチヨリく剃つたが、同じく雷のやうな躰をかいいて死んだやうに爲つてゐる。かくして女郎の頭を全

坊主に刺つて了つたが、まだ眠つてゐる。さあ憊うなつてみると、禪僧も心配でならぬ。此儘で女郎の眼が覺めたら大變ぢや、早く逃げやうと、忽ち用意を調べて女郎屋を飛び出し、一目散に逃げ去つて了つた。女郎は坊主にされたのも知らず、夜が明けて漸く眼を醒ましてみると御客様が居らぬ。これはと周章狼狽きつゝ、「御客様は何處へ行つた。御客様は何處へ行つた。坊さん何處へ行つた、坊さん何處へ行つた」と云つて、寢惚氣眼で捜し廻るうちに、不圖自分の坊主頭に手が觸れた。すると「やれく坊さん此處にゐるか、それなら私は何處へ行つたらう」と申したと云ふ話がある。

馬鹿氣た話ではあるが、うっかりすると、自分を捜し廻つても解らぬ事がある。自己を失却して了つては困る。が併し自己を捜し出さうとする努力だけは、確かに賞すべきである。